

天候不順は気になります、これまでも乗り越えられるべきものはそれだけではありません。

今年の天候は一体どうしたというのでしょうか。4月、5月は肌寒い日が続く、北国特有の5月のカラリとした青空が続く日がなかなかありません。農場の事務所から見通す世界自然遺産の白神山は、例年に比べ緑を増す早さがゆっくりにあります。農場本場のある深浦町の気象観測所によれば、平均気温は4月が平年を1・1℃下回り、5月中旬に至っては、9・5℃と平年より3・8℃も低く、観測史上最も低温の記録になるほどです。

例年6〜7月に発生する日本沿岸特有の濃霧が早くも5月下旬に農場を覆うなどしているのです。雨の日が多く、晴れ上がらずに乾燥しにくい、畑に入れない日が多くなっています。幸い5月も終わる頃になって、気温はようやく平年を上回るようになり、ほっとしています。それでも、5月末現在の作業は例年よりも1週間以上遅れています。

しかし、契約栽培を基本とした農場経営からすれば、どんな気象になろうが、農産物を安定的に供給するのが使命なのです。

われわれのような400haを越える大規模露地栽培は、ハウスによる施設栽培や水が保温の役目を果たすコメ作りなどに比べて、不順天候に弱いのは事実ですが、それでも、少し高畝にする、明渠を作り排水対策を講ずる、そして、晴れて土が乾けば、可能な限りの労力を一気に投入して適期作業を行うなど、少しでも安定生産につながる対策はとるようにしています。

そもそも、深浦本場のこの土地は、風が強い、濃霧が発生する、土が痩せている、傾斜がある、など農作物の栽培条件としては、劣悪な条件でした。その悪条件をわれわれは強い意志と不断の努力で克服してきたのです。こうした農場作りの闘

いの足跡はわれわれの友人の鳴海勇蔵氏(45)が著した「超大型農業を成し遂げた男たち」(筑波書房)に書かれています。これからも幾多の苦難にぶつかるとは覚悟しています。

多くの人たちとつながる農場経営

小麦は農場で最も作付面積の多い作物です。担当する竹内雅孝(45)によれば、小麦の生育は1週間ほど遅れているとのこと。

昨年初めて植えた岩木山農場(昨年新規取得した岩木山麓の畑180haを便宜的にこう呼ぶ)の100haの小麦が雪の下から顔を出したのが4月20日です。心配した雪腐れ病はそれほどみられませんが、昨年の種蒔き後、雨が続き発芽不良となったのが尾をひき、生育は今一歩です。それでも、まだ雪を抱く津軽の秀峰岩木山(1625m)と、小麦の緑のジュータンは見事なコントラストを見せています。

追肥はブロードキャストで100haを3日ほど済ませます。これまで2回追肥し、昨年までであればこれで終了ですが、今年は収量の確保と、製粉会社から要望のある高アミロース小麦生産のために6月上旬に穂肥もやることにしています。小麦の背丈が高くなってきたので、作業はやりにくいのですが、なんとか工夫してやってみせると竹内は意気込んでいます。

小麦に次ぐ面積のバレイシヨは悪天候のはざまを縫いながらポテトプランターの能力と人力を生かして、どうにかして適期の5月半ばまでに植え付けを終えました。担当する佐々木君夫(46)は人と機械のやりくりにかなり苦労しました。植え付け面積は昨年並みの80haを確保しましたが、不順天候が続くだけに、なんとか無事に揃って出芽

してくれることを願っています。

さて、私の担当するダイコンですが、本格的な植え付けは7月に入りますから、まだまだ作業には余裕があります。それでも、J-T(日本タバコ産業株式会社)からの委託でトンネルマルチによる50aを5月初め深浦本場で種蒔きました。また、6月上旬にはマルチ栽培で50aほどを岩木山の畑に時く予定です。

ダイコンは、今年から大手スーパーへ生出荷をすることにしました。年々、新しい取り組みをしています。

また、この春掘り取った越冬ニンジンは大加工メーカーへの納入ですが、急に山形県の農協関連業者から漬物用の注文依頼が舞い込んできました。人とのつながりの大切さを思い知らされる出来事です。

多くの人とつながる、これが今日の大型農場に発展した理由のひとつだと考えています。大面積経営になると、資材の確保から始まって、農産物やその加工品の販路まで関わってくる多くの人たちの協力なくしては、成り立たないのです。

確かに、深浦の地に新規参入してこれだけの農場を作りあげたという自負はありますが、佐々木も、竹内も、そして私も多くの人の応援無くしては今日のわれわれはなかったと思っっているのです。われわれの農場作りを知ってやって来る若者もいます。毎年、中国からの研修生も引き受けています。今年も6月に入ればまた一人やって来ることになっています。

人とつながる、人をひき付ける、そんな農場作りをこれからも続けたいと念じています。そんな願いから、最近私は講演をする際にこんなことを言っています。「万民引力の法則」。もちろん、リングの落下を見てニュートンが発見した「万有引

上：まだ雪の残る岩木山と新しい小麦畑
下：モロオカ250psとスガノ深耕プラウ



力の法則」をもじった造語ですが、多くの人同士がつながる農業をやりたいという私の思い入れの言葉なのです。

設備の充実と新しい計画の始動

農作物生産では、何と言っても土作りが大切です。そのために、われわれは小麦、ダイコン、パレイシヨを3本柱にして輪作を組んだり、緑肥作物を栽培したり、堆肥を投入したりなどして地方の維持に努めてきました。土地生産性の低い小麦を大量に作付けするのも、その麦稈を有機物としてすき込むことができるからです。

また、作土をできるだけ深くするために、プラウによる深耕にも力を入れてきました。岩木山農

場では、今年の植え付け前にすべて深耕するつもりです。とくに農場の主作物であるパレイシヨ、ダイコン、ニンジン、ナガイモなどは、土物類の性質上、品質、収量面とも、深耕をするしなみでははつきりと差が目に見えます。

ここで活躍しているのがスガノ農機製の24インチ大型プラウです。能率、破壊力とも抜群です。しかし、岩木山農場の一部には石が大変多い畑も存在しています。こうしたところでは、前号で紹介した石に強いスウェーデン製のプラウが土作りを担っています。深耕は機械の力なくしては実現できないのですが、そのために入れわれはプラウ、あるいはサブソイラのようなタフな深耕作業機を使いこなせる大型のトラクタを揃えています。これまでの最高馬力は126psでしたが、国内では最大と聞いている、モロオカの250psのクローラトラクタを今年導入しました。このトラクタ、轟音を響かせながら広大な畑を疾駆しています。

また、プラウ耕最盛期の5月30日。岩木山農場に多くの人の参集を得て、本年度建設する野菜の集出荷施設の起工式を執り行いました。

岩木山農場は、前身が牧草栽培地だったところが多いため集荷場がまったくありません。収穫した農産物は、降雨などを避けるため、ただちに約60km離れた深浦本場に運び込まなければなりません。その時間的ロスたるや大変なものがありました。そのため、集荷・貯蔵機能を持ち、今

後増やす予定のキャベツやダイコンなどの予冷ができ、さらに従業員の休憩所も兼ね備えるという集出荷施設を作ることになったのです。深浦本場との役割分担を整理して、補助事業として採択されることになり、起工式にこぎつけた次第です。この施設の完成によって、岩木山麓の畑での営農はかなりスムーズになると踏んでいます。

前号で紹介したように、この岩木山農場では、将来観光農業の展開も視野に入れていますが、その運営主体となる組織を作りました。5月2日、農事組合法人「森の中の果樹園」で登記しました。黄金崎農場としての運営も考えたのですが、参画者を広く集めたいという趣旨から、農場とは別の組織を作ったのです。18人の人たちが出資しました。もちろん、農場の構成員は全員参画しています。法人の名付け親は佐々木君夫で、代表理事は佐々木の妻・良子です。良子は自ら果樹園を経営しており、そこでのクリ、サクランボ、スモモなどの見事な実りを見れば、代表理事にはうってつけだと思っています。夫の君夫も「農」の腕のよさは自他とともに、認めるどころですが、こと果樹栽培では良子の方が優れているようです。この「森の中の果樹園」は平成11年オープンをめざし、これから少し時間をかけて内容を煮詰めていくことになっています。

このように、農場は新しいことを少しずつ取り入れながら、確かな歩みで前進しています。



きむら・しんいち／1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立